
地球が三回廻った日

まっつあん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地球が三回廻った日

【Nコード】

N0691V

【作者名】

まつつあん

【あらすじ】

地球が三回廻った日、誰かに幸せが訪れて、誰かに不幸が訪れる。

幸せが訪れた日から数えて、地球が三回廻るまでに、必ず不幸が訪れる。

不幸が訪れた日から数えて、地球が三回廻るまでに、必ず幸せが訪れる。

(前書き)

はじめに言わせていただきます。

読み終わったあと、怒らないでください――(．――(．――

地球が三回廻った日、誰かに幸せが訪れて、誰かに不幸が訪れる。幸せが訪れた日から数えて、地球が三回廻るまでに、必ず不幸が訪れる。

不幸が訪れた日から数えて、地球が三回廻るまでに、必ず幸せが訪れる。

そんなことの繰り返しで世界は廻っていた。

あと地球が三回廻るまでに——つまりあと三日ほど経つ間に、確実に大和^{だいわ}ヤマトに不幸が訪れる。これは何をやっても回避できない決定事項だった。

「はあ……」

狭い通学路をゆっくりと歩きながら、ヤマトはタメ息をついた。ヤマトに幸せが訪れたのは昨日。地球の回転数で表すと一回転前。つまり、今日から不幸を待つ日が始まるというわけである。

「なんだよ。タメ息なんかつくくんじゃねえ。幸せが逃げるぞ」

ヤマトの隣を歩く竹倉^{たけくら}武蔵^{むさし}が迷惑そうに言った。黒縁メガネがよく似合う男である。

「うるさいな。もう少して不幸がやってくるんだよ」

あと三日の間に不幸がやってくるようになっていいるヤマトにとっては、なにかもが憂鬱だった。登校中も、授業中も、昼休みも放課後も。何をやっても、いつ不幸がやってくるのかという不安が付きまとう。楽しいはずの高校生活は、いつ来るかわからない不幸に

よって脅かされていた。当然、気分は良くならない。ゆえに憂鬱だった。

「あれ。お前にいつ幸せが訪れたんだ？」

「昨日。回転数だと一回転前」

「回転数はいいいよ、わかりにくい」

「どっちかって言うと回転数の方が正しいんだぞ。地球が一回回転するのに掛かる時間は、約二十三時間五十六分。一日経たないんだ」
「俺は、正しいじゃなくて、わかりやすいでいいんだよ。なんだよ一回転前って。わけわかんないだろ」

ヤマトが垂れるうんちくを、自論でもって軽く流す武蔵。二人の会話はいつもこんな感じだった。ヤマトが語り、武蔵が流す。武蔵は、ヤマトが垂れるうんちくの半分以上を受け流している。ヤマトもそれは分かっている、それでもまだ話す。

ヤマトも武蔵も、そんなやりとりを二年続けていた。

こんな感じがちょうどいい。ヤマトはそう思っていて、おそらく武蔵も同じだろうと思っている。

「で、どんな幸せだったんだ？」

「お前、おれの幸せに気付いてなかったのか？ あれほど幸せなことはないぞ」

「なんだよ、なにがあったんだ？」

わざと焦らすようにヤマトは話した。

毎日一緒に登校して自分の幸せに気が付かないとは……愚かなやつめ。ヤマトはそう思っただけなら、なぜなら、あの出来事は何事にも変え難い、とんでもない幸せだったからだ。

「教えてやろうか？」

武蔵を焦らすために、ヤマトはもったいぶってみせた。

「いや、いい。よく考えたら、お前の幸せなんてどーでもいい。それに、教えてやろうか？ って言われたら、なんか腹立つ」

「……仕方ないな。教えてやるよ」

武蔵の予想外の言葉に若干狼狽したが、ヤマトは武蔵を無視して

話を進めた。

「あれはな、昨日の昼休憩のことだ」

「いや、別に聞きたくないって……」

ヤマトは強引に話を進める。

「クラスのアイドル、海野幸うみのさちさんとな」

「だからいいって……」

武蔵の言葉は聞こえない。

「一緒にお弁当を……」

「いやだから、別にいい」

「人の話は静かに聞けええええ！」

「なんだよ！？　なんで突然キレてんの！？」

相次ぐ武蔵の言葉に、ヤマトは耐え切れなかった。赤い布を見た闘牛の如くキレ、武蔵の胸ぐらを掴んで言った。

「つべこべ言わずに話を聞け！」

「はいはい……始めから聞いてくれと言えはいいものを。これだからわかりやすすくないヤツは……」

「なんか言ったか？」

「いいや、なにも」

ヤマトの興奮は一時収まり、いつもと同じ登校時に戻る。二人が並んで話をしながら歩く。それがいつもの登校時の風景。

ヤマトは嬉しそうに、武蔵に向かって話し始めた。

「あれはな、昨日の昼休憩のことだ。偶然ばったり海野さんと出会ってな。一緒に昼ごはんを食べたんだよ」

ヤマトの言う海野さんとは、ヤマトのクラスで一番可愛いと評判の海野幸うみのさちのことだ。成績優秀、容姿端麗。文句なしでクラスのアイドルである。

先日、ヤマトはその海野幸と校舎の中庭で出会い、そこで一緒に昼ごはんを食べたのだ。

「んで、それが？」

武蔵は、そのどこが幸せ？　とでも言いたいような顔をしてヤ

マトに答えた。

「それが？　って……お前、これ以上の幸せがあると思うか？」

ヤマトは、こいつアホか？　というような顔で問いかける。

武蔵はさっき同じような顔をして答えた。

「ある」

「ないね」

「いくらでもあるな」

「うるせえ！　おれにとっては幸せなんだよ！」

なにを隠そう、ヤマトは海野に憧れているのだ。昨日の昼食時間と言ったら、言葉では表せない感動があった。母の作った弁当のおかずなど覚えていない。覚えているのは、海野の弁当のおかずと、それを口元に運ぶ海野の優雅な姿だけだ。

「まったく……人の幸せをバカにしゃがって」

「そんなことで幸せ感じてるから、いつになっても海野が振り向いてくれねえんだよ」

「うるさい。で、お前はどうかんだよ」

自分ばかり話をさせておいて……と思い、ヤマトは武蔵に話を振った。

話を振った直後に、そういえば話を始めたのは自分だったな、と思いつく恥ずかしくなったが、武蔵は気付いてないようなのでここでは触れないでおく。

「俺はこの前不幸があった。二日前だな。不幸があった日から数えて、昨日は何もなかったから、明日か明後日には俺に幸せが訪れる」

「ふーん」

正直、他人の幸せなどヤマトにとってどうでもいい。

「お前今、他人の幸せなんてどうでもいい、って思ってるだろ」

「……」

「凶星か」

なるほど、武蔵が自分の話を聞いている時はこんな感じだったのか。

「……ったく。なんでお前と二年もつるんでのか、自分でもよくわからん」

「奇遇だな。おれもだよ。……で、この前あった不幸ってどんなだったんだ？」

「簡単に言うと、夢オチだな」

「夢オチ……？」

簡単すぎて、逆によくわからない。

夢オチと言ったら、すごくいいことがあったのに結局夢だった、っていうあれのことだろうか。

「お前が今考えてることで、おおよそ間違いじゃない。俺にやってきた不幸は夢オチだったんだよ。あー、思い出すのもいやになる」

「そんなにいやだったのか？ 夢の中ではエンジョイできたの？」
ヤマトにしてみれば、その程度の不幸だったら大歓迎だ。もちろん、不幸がやってくると決まっている時だけけど。

「バカやろう。お前、昨日海野さんと一緒に昼飯食べたんだろ？」

それが夢だったらどうする？」

「どうするっていわれても……まあいい気はしないな」

いい気はしない、というか完全に嫌な気分になる。

「そういうことだよ」

「……どうということだよ」

「夢オチって、想像以上にガックリくるものなんだぜ。ま、俺は今日から幸せを待つハッピーライフをエンジョイしますかね」

「てめ、嫌味か」

「人の不幸は蜜の味ってね」

話をしているうちに、学校にたどりついた。

武蔵と並んで校門をくぐりながら、今からやってくる不幸がどうでもいいものだったらいなと思った。

ヤマトが登校して、一時間ちよつとが経った。すでに授業は始まっている。

科目は古典。なにやらわけのわからない昔の言葉を先生がべらべら喋っている。ヤマトは文系が苦手だった。

教科書とノートは開いているだけで、まったく手をつけていない。クラスメイトはわりと真面目に授業を受けているが、今日はどうも真面目にやる気分ではない。毎日、真面目にやっているとは言い難いけど。

一番の原因は、今日から三日後までに必ずやってくる不幸の事だろう。それを考えると、授業など真面目にやっていられない。ただただ、不幸に備えるだけだ。

「ふぁ……」

黒板など目もくれず、窓の外に視線を泳がせていた。今日は空が綺麗だ。雲が一つもない。こんな空を見ていると、まぶたが重くなってくる。

ああ、不幸なことが起きるなら、気が付いたら鳥になっていた、なんてことにならないかな……。

漠然とそんなことを考えながら、ヤマトの意識は鮮明さを欠いていった。

＊

ヤマトは学校内にある中庭のベンチにすわっていた。二人用のベンチだ。昼休憩にここでカップルが食事をしているのを見たことがある。女子と縁の無いヤマトにとっては、雲の上の領域だった。

「ヤマトくん？ 何見てるの？」

一人で座っていると思い込んでいたヤマトを呼ぶ声が聞こえる。声はヤマトの隣から聞こえていた。少しビクリして隣に目を向ける。

そこにいたのは海野幸だった。成績優秀で容姿端麗なクラスのア

アイドル。

「……あれ。なんでおれの隣に海野さんが？」

おかしかった。何がおかしいのかよくわからないが、おかしかった。

学校の中庭に、しかも二人用のベンチに、ヤマトが海野と二人で座っている。学校の生徒全員に聞いても、おかしいという言葉が返ってくるに違いない。

「なんで、って言われても。わたし達、もうカップルじゃない。ここに二人で居ても、なんにもおかしくないわ」

「……え？」

おかしかった。やはり何かがおかしい。ヤマトと海野がカップルという時点で、もうすでに何かがおかしい。

「ねえ、いつまでも『ヤマトくん』って呼ぶのいやだな。『ヤマト』って呼んでいい？」

おかしい。海野はいつも『大和くん』と呼んでいた。

「……はい」

なにかがおかしいとわかりつつも、憧れの人にこんなことを言われたら、『いいえ』と言えないのが男の性である。

「えへへ、やったあ」

海野は頬を赤く染めて笑顔を見せた。

（か、かわいい……）

何かがおかしいはずだった。だが、海野の笑顔を見ると、どうでもよくなってきた。道端に転がった石ころを見てもどうでもいいとは思わない。それとまったく同じ。何かがおかしい、というさっきまでの考えは道端の石ころ同然となっていた。

「ねえヤマト……手、つなご？」

海野はベンチから立ち上がり、手を差し伸べた。ヤマトはそれをやさしく握り、ベンチから立ち上がる。

「屋上までいこう」

海野はそう言って、歩き始めた。ヤマトは手を握ったまま、それ

について歩く。

屋上へはすぐに着いた。中庭から階段使えば、あっという間についてしまう。ヤマトはもう少し時間が掛かればいいと思った。いつまでも、海野と手をつないでいたい。

「空が綺麗ね」

「ああ、すごく綺麗だ」

君のほうが綺麗だよ、なんて恥ずかしすぎて言えない。

鮮明に思い出せないが一人で居るときに、空が綺麗だと思ったことがあるような気がした。しかし、そこまで気にしない。雨が降っている時以外の空は、大体綺麗なものだ。

しばらく二人で空を眺めていた。時間がまったく経っていないように感じる。雲が動くのがとても遅く感じられた。風が吹くたびに、海野の髪を揺らし、シャンプーか何かのいい匂いが鼻をくすぐった。ヤマトはとても幸せだった。おそらく、これ以上の幸せはこの先訪れないだろう。そう思った。

「ねえヤマト……」

海野がこちらに向き直って、言った。

「なに？」

「キス……しようか」

「ええ!？」

「嫌なの？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「じゃ、いいじゃない」

海野が目をつむり、ヤマトは海野から視線をはずした。

こんなことがあっていいのだろうか。成績優秀で容姿端麗なクラスのアイドルと名高い海野幸と、こんなことをしていいのだろうか。ちらっと海野の顔を見る。頬を赤く染め、目をつむって口を閉じている。すぐそこに、ヤマトが二年間憧れた海野がいる。

「……」

黙って海野に視線を戻し、やさしく肩に手を置いた。

そつと、顔を近づける。

ここまでできたら、もうキスだろうがなんだろうが、いけるとこまでいける気がした。

海野の息遣いが聞こえる。不規則な呼吸。海野も緊張しているのだとわかった。

だんだんと顔が近づき、ヤマトも目を閉じた。

その瞬間に、ヤマトの意識は鮮明さ失い、真っ暗な闇の中に落ちていった。

＊

ヤマトの意識は次第に鮮明さを取り戻していった。

そこには、真っ暗な闇などなく、海野の姿などありはしなかった。あつたのはわけのわからない昔の言葉で埋められた黒板と、ブサイクな先生の顔だった。

即座に、理解する。

「え、夢オチ？」

これがいわゆる、すごくいいことがあつたのに結局夢だった、っていうあれだろうか。

イスを倒し、机を思い切り叩いて、ヤマトは咆えた。

「ええええええええ！？ 夢オチかよおおおおおおお！！！」

これが、幸せが訪れた後、地球が三回廻るまでに起こる不幸だとしたら、これから先地球が何回廻ってもこれ以上の不幸は訪れないだろう。

親友の言っていた思った以上にガツクリと来る夢オチを身を持って体験し、ヤマトは教室で無惨に咆え続けた。

(後書き)

ご覧の通り、夢オチでした。
夢オチ嫌いの人、すいません or z

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0691v/>

地球が三回廻った日

2011年7月21日03時10分発行